

茶の湯文化学会会報 No.70

第70号 / 2011年 9月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

珠光円悟（園悟）断想

倉澤行洋

表題は、伝珠光所持の円悟墨蹟という意味である。ところで皆さんは、この表題をどう発音して読みますか？ きつと「シユコウ…」と「ジュコウ…」に分かれるでしょうね。

かつて布目潮瀨先生が、永島福太郎先生に「シユコウかジュコウ」か、どちらですか」とお尋ねになったことがあった。すると永島先生は「どちらでもいいらしいですよ」とおっしゃり、

ジュコウをはやらせたのは私だということになって、

と苦笑なさったという。これは布目先生から直接うかがったことであるが、布目先生はまた、これをどこかに書いておられたように思う。

実はこれより少し先、私は、ある雑誌に、私はクラサワと呼ばれたりクラザワと呼ばれたりするが、どちらに呼ばれても気にはならない、珠光も在世時にシユコウ、ジュコウの両様に呼ばれ、それを大して気にもしていなかったのではないか、であれば私たちがどちらに読んでも構わないのではないか、むしろ、どちらが正しいか正確にはわからないのに、「珠光」「珠光」などと振仮名をつけ、恣意的な読み方を人に強制する

のはよくないのでは、という趣意の一文を書いたことがあった。そしてそれに付け加えて、辞典編纂で見出しの排列を決める場合などのように、どうしてもどちらかを優先させなければならない時は、シユコウを選ぶ方がよいとし、その理由も書いた（のちに拙著『珠光』に収録）。

布目先生とお話になった時、永島先生の脳裏にこの拙文の記憶がよぎったのかも知れない。

それからまたかなりの時を経て、茶の湯文化学会で、永島先生にご講演をお願いしたことがあった。その時の演題は「珠光雑談」。このご講演で先生は、珠光をずっとシユコウと発音しておられた。

後日、永島先生から

脱線尻切れの講演申し訳なく存じ居ります。あれから、このプリントを訂正こしらえるまで時間を労しました。これを貴御本に差上げることができたらと思うこと切です。

で始まる鄭重なお便りをいただいた。この中の「プリント」は珠光の伝記資料であり、「貴御本」は私の著書『珠光 茶道形成期の精神』である。この貴重な「プリント」とこのお手紙を、「研究ノート」といつ

た体裁で会誌にでも出そうかと思ひながら、未だ果たさずにいる。

さて表題の「珠光円悟」は、珠光が一休宗純から印可の証として与えられたという伝承のある円悟克勤の墨蹟で、柳宮御物として伝来し現在畠山記念館の所蔵である。この墨蹟は、建炎二年(一一二八)二月、弟子の虎丘紹隆に与えられたものであるが、日本臨済禅の法流を遡ると応・燈・関に至り、さらに遡ると虎丘そして円悟に至るから、日本の禅にとって貴重な墨蹟である。

日本には、この珠光円悟のほかに、著名な円悟墨蹟が二つ伝来していた。一つは現在東京国立博物館所蔵になっている、いわゆる「流れ円悟」で、これは珠光円悟と同じく虎丘紹隆に、宣和六年(一一二四)に与えられたもの、他の一つは、珠光円悟と同年同月に、密印安民に宛てられた書簡で、水戸徳川家に伝来し、のち大阪藤田家に入ったが、第二次大戦の空襲によって焼失してしまつた。さいわい写真が残っている。

ところで、本稿の表題「珠光円悟」に異和感を持たれた方もあると思う。本稿で円悟と表記した箇所は、ふつう圓悟と表記されるこ

とが多いからである。そのことを知りつつ、あえて円悟の表記を採用したのは、第一には、日本で、圓悟でなくて圓悟(略して円悟)を用いてきた長い歴史に配慮したためである。特に茶に関係する文献では、ほとんどと言ってもいいほど、圓悟ではなく圓悟(円悟)が用いられてきた。例えば、津田宗及や神谷宗湛の茶会記、『南方録』の円覚寺本・立花家本、松屋の『利休居士伝書』の小堀宗中本、草間和案の『茶器名物図彙』など、みな然りである。これらを、茶人たちの無学無知の故と簡単に退けることは、以下に述べる理由からできないのである。

本稿で円悟の表記を用いた第二の理由は、「流れ円悟」に付属する、いくつもの文書や箱書等での表記がことごとく「円悟」であることである。中でも、古岳宗耳、春屋宗園、沢庵宗彭、玉舟宗璠などの大徳寺僧、更には東岩浄日など中国元代の禅僧の手になるものまで、「圓悟」であることは、看過できない。付属文書ではないが、江月宗玩の『墨蹟之写』でも、この墨蹟を「圓悟」と表記している。

円悟の表記を用いた第三の、そしていちばん重要な理由は、右に述べた日本伝来の三点

まそのポイントの一つを示せば、松屋の『利休居士伝書』や『松風雑話』に珠光円悟の行数を七行としているのに、柳宮御物の円悟は二十三行ある。また、右の『利休居士伝書』や『松屋名物集』によれば、珠光円悟の表具は、

中茶へいけん、上下あさぎへいけん、一文字風帯紫地印金、露紫

であつたとされるが、これは現在の柳宮御物円悟の表具と合ひにくい。もっともこれは柳宮御物円悟の表具がいつか仕替えられて、珠光表具とは違つたものになつていゝと見れば、

いちおう辻褄を合わせることができよう。いま一つの問題点は、柳宮御物円悟は、はたして円悟の真筆か否かということである。右に述べたように、日本には円悟墨蹟として伝えられてきた著名なものが三点ある。しかしこの三点がすべて同筆とは認め難い。三者を仔細に観察しての私の結論は、流れ円悟と水戸家伝来円悟とは同筆であるが、畠山の柳宮御物円悟は別人の手になる、ということである。かつて東京国立博物館に「流れ円悟」の調査にうかがつた時、立合つて下さつた竹内尚次先生も同じ意見であつた。

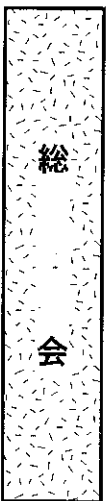
右の推測が当たつていゝとした場合、もし

流れ円悟、水戸家伝来円悟を円悟の真筆とすれば、柳宮御物円悟は偽筆ということになる。しかし柳宮御物円悟は、禅の書として見た場合、禅機みなぎるすばらしい書で、流れ円悟や水戸家円悟と比べても少しも見劣りしない名墨蹟であり、偽物などと言つて切り捨ててしまふことは到底できない。久松真一先生も同じ感想を洩らしておられた。これに関して、私はかねて一つの仮説を立てている。それは

柳宮御物円悟は、円悟の弟子の大慧宗杲による代筆もしくは写しである。

ということである。これはまだ仮設の域を出ないが、これが事実である可能性は小さくはない、と私は思つている。大慧がこの書の日付の建炎二年二月の前々年の五月、円悟が住持で虎丘が分座していた天寧寺で大悟し、そのあとしばらくそこで記室(書記)をしていたという経歴の持主であるということも思ひ合はされる。

識者の示教を仰ぎたい。



平成二十三年度総会は、六月十一日(土)、大会研究発表会々場と同じ明治大学で午後一

の円悟墨蹟のうち、密印安民あて書簡の署名に「円悟」の字が用いられ、珠光円悟の署名も「円悟」と読めることである。なお「流れ円悟」には「仏果老僧克勤」と署名されており、「円悟」とも「圓悟」とも書かれていない。日本で板行されている語録類でも「圓悟」と表記されているものがある。例えば、宋代の子文が編した『佛果圓悟禪師心要』は日本臨済宗の著名な学僧幹山師貞による浩瀚な注解書も『圓悟心要添足』であつた。

これらの事例から考えると、「圓悟」「圓悟(円悟)」のいずれかが正しくて、他は誤つていゝとは軽々しく断定すべきではない。思うに、「圓」と「圓」は通用する文字であるから、「圓悟(円悟)」「圓悟」のいずれを用いても誤りではなく、実際に両方が併用されてきたのであろう。

珠光円悟については、なお考究を要する問題点がある。その一つは、いまは畠山記念館所蔵となつている柳宮御物の円悟墨蹟が本当に珠光円悟であるか、という点である。その詳細は拙著『珠光 茶道形成期の精神』や『藝道の哲学 宗教と藝の相即』に書いたが、い

時から行なわれた。総会を進めるにあたり、議長として矢野理事が、副議長として高橋副会長が満場一致で選出された。

第一の議題は平成二十二年度の事業報告および決算報告で、矢野理事から事業報告が、神谷副会長から説明されたあと、引き続き監査報告(矢野理事の代読)が行なわれ、拍手で可決・承認された。

次に第二の議題として平成二十三年度の事業案(高橋副会長による説明)および予算案(神谷副会長による説明)が提案され、総会・大会、研究会、各地区の例会予定、会報・会誌の発行計画、収支案等の説明がなされ、これもとくに異論なく全会一致で承認された。

このあと、会場から学会ホームページに関する意見が出、学会誌『茶湯文化』の検索方法に対する質問と、例会案内の日時を全地区統合した表示にという要望があり、逐次改善を検討していくということになった。

最後に、第三の議題として役員改選に入った。影山副会長から改選案の説明があり、拍手をもって承認された。これを踏まえ、引き続き会長となられた谷晃会長から挨拶があり、前任期における財務状況と会員数の危機的状況がひとまず改善したこと、諸行事をいっそ

う充実させ、地区によってかなり異なった形式になっている例会に関し、会員が戸惑わないよう案内情報などもっと詳しく周知すること、新たな課題として、学会名を見直かどうかを検討すること、などについて触れられた。

なお、総会で承認された役員の一覧は下記のとおりである。(敬称略・五十音順)

会長 谷 晃
副会長 影山純夫 谷端昭夫 中村修也
参与 倉澤行洋 筒井紘一 戸田勝久
中村昌生 林屋晴三 村井康彦
理事 尼崎博正 飯島照仁 池田俊彦
岩崎正彌 神谷昇司 熊倉功夫
小泊重洋 小西茂毅 佐藤豊三
高橋忠彦 竹内順一 田中秀隆
谷村玲子 永吉溪滋 名児耶明
日向進 H. S. Henneman
堀内國彦 美濃部仁 矢野 環
吉井 清
監査

都が東京か、「性格」は革新的か保守的か、「担い手」は数寄者か社中か、という問題設定がなされた、これに対し、時期を、幕末維新混乱期(十九世紀後半)、坂の上の雲の時代(十九世紀末〜二十世紀初頭)、デモクラシー時代(二十世紀初頭)の三期に分けながら、二者択一的には断定できない両義的構造の生じた状況が述べられた。



その後の討論では、いろいろな話題が出たが、大きくは三点あった。一点目は、人の多様化についてで、茶が各地に伝わっていくに伴い、藩の茶堂、各地の豪商・豪農も茶を担っていき、また彼らどうしも交流して多面的になっていく。茶に関する印刷物を通して、人的拡がりが多面的になったということであ

井尻益郎 小川後楽

大 会

今年度の大会は、平成二十三年六月十一日(土)午前十時半から、東京都千代田区神田駿河台の明治大学で開催された。参加者は百五十名を越え盛会であった。

最初に谷会長の開会挨拶があったあと、四題の研究発表が、昼休みと総会を挟んで行なわれた。発表順に示すと、第一題「大鑑清規と中世信濃の喫茶」(赤津宗伸氏)、第二題「瀬戸内の茶の湯―輛の浦・中村家の茶会を中心に―」(松本孝尋氏)、第三題「岡山の茶の湯と文化―速水流から民藝まで―」(市村祐子氏)、第四題「認得齋宗室と長崎」(山田哲也氏)である。四題を通し、日本各地での茶の湯のありようが個々に知られる研究で、結果的にシリーズのような興味深い構成となった。発表内容の詳細については、『茶の湯文化学』であらためて取り上げられるので、そちらを参照されたい。

研究発表終了後、午後二時三十五分頃から、シンポジウム「茶の湯の全国的展開―周辺から中心をみなおす―」が行なわれた。パ

る。

二点目は、茶の地域性についてで、十八世紀に家元の権威が地方に伝わっていくが、やがて各流儀が混在していくとともに、これに煎茶も加わって、多様な茶が開発されていった。また応接の仕方にも、色々な変化が見られるようになったということが明らかになりつつある、というものであった。

三点目は近代の茶についてで、従来は、戦後の家元制度の強大さが、戦前までの家元制度にもそのまま当てはめて考えられてきたが、そうではなく、家元制度よりも、町の一般の茶の方が盛んで、流儀に束縛されない柔軟な茶が行われていた。また茶道具も、民芸や李朝のものへの評価が上がったりもしていた。従来の見方に対する見直しが必要であり、この点でも、周辺から中心を見直す作業が必要と考えられる、とのことであった。

例 会

東京例会

(平成二十三年七月二日)

「お茶」から広がる文芸世界

田中秀隆

ネリストに、谷端昭夫氏・中村利則氏・田中秀隆氏の三氏を迎え、熊倉功夫氏の司会により討論は進められた。

まず谷端氏が「流儀化への道」というテーマで、江戸中期までの茶の湯に言及された。十七〜十八世紀における宗匠の変遷を四相に分け、十七世紀初頭(身分別の茶)、十七世紀前半(地方における茶堂の活動・身分の混在)、十八世紀前半(地域的な核の展開・身分的拡大)、十八世紀後半(宗匠家の固定)という構成で、おのおの各地での具体例の紹介とともに変遷を明らかにされた。つづく中村氏は、主題を「茶の湯の環境を見る三つの視座」、副題を「江戸後期沿海諸地域の町人に浸透した茶の湯」とし、三つの視座を、①京都との連携・各地域間の交流、②多様な茶の湯の展開、③多層な茶の展開、に設定して、①では岡山笠岡・兵庫赤穂・広島鞆の浦の例、②では接客・迎客・饗応という三種の茶の湯について、③では抹茶と煎茶の両立について紹介され、これらの総合的把握の必要性も唱えられた。

三人目の田中氏は、「近代茶道の両義性」というテーマを提供され、副題は「中心、性格、担い手」とし、近代茶道の「中心」は京

近著『お茶はあこがれ 続』(書肆フローラ)は、「お茶」一般に視野を広げたときに見えてくるものの中に、お茶の文化の本質を求めることができるかと考え、「大切なものはお茶だ」と考えながら執筆した本であることを述べた。まず、エッセイが出来てくる舞台裏をから明らかにするため、映画「ラスト・サムライ」と「ティファニーで朝食を」や小説『草枕』や『キッチン』でのお茶のシーンへの違和感を例にあげた。

次に、お茶へのこだわりがあると、映画や小説などにさらなる興味がわいていることを手がかりに、小説には、二つの読み方があり、感情移入をするレベルの読み方と解説のコードを手に入れたレベルの二つが存在し、お茶への関心が、解説のコードの一つを構成することを指摘した。

最後に、将来にわたって「茶の湯」を活性化させるためのコンセプトとして、「茶の湯を支えるお茶の文化」を提案した。ここでの「お茶」とは、「お茶を飲みませんか?」と言ったときに含意される、喫茶を幅広くとらえた命名である。「お茶」の性質として、一、「あこがれ」として広まった、二、人と人とを結びつけるものである、三、「世界」を広

げてくれるものである、の三つを指摘した。「茶の湯」は、「お茶」の文化基盤を支えられることによって成り立っている。「お茶」の文化基盤の中から、新たな「お茶」との関わりをみつけるきっかけを作るように促すことが、「茶の湯」の活性化にもつながっていると考えて執筆したことを明らかにした。

(平成二十三年九月三日)

「陸廷燦の『続茶経』について」

高橋忠彦

清の陸廷燦の『続茶経』は、最大規模の茶書として知られるが、正面から検討されることはまれである。製作の契機は、崇安の県知事に赴任した陸廷燦が、武夷茶の献上に熱心な福建総督から下問を受けたため、資料を収集したことによるという。本来は特定の地域の茶書を意図し、最終的に大規模なものになったのである。

その体裁は、『茶経』の十章に沿って分類され、過去の文献資料を編集した「類書」の体裁をとる。しかし、「二之具」（『茶経』では製茶道具の説明）がほとんど喫茶用具で占められているという混乱もある。

『続茶経』から、中国の茶文化史を考える

本研究は喫茶文化史上茶聖と称された陸羽と双璧と称されながらも、喫茶文化にどのように関わり、どのような影響を与えたのか十分には解明されていなかった盧同について、中国茶文化史におけるその位置付けを明確にし、併せて日本における盧同の影響がどのようなものであったのかを考察し、解明しようとするものである。

唐代の盧同は、韓愈の詩「寄盧仝」のみを基盤にその人物像が形成された。それは俗世を離脱しながらも、広い交友関係の中で無官の賢人としてその名声を得る。しかし、そうした伝承には茶に関して触れられていない。陸羽像が唐代に成立した伝承を基盤に、茶神として既に喫茶文化の中に位置付けられ、喫茶様相の変化と共に展開していったのとは全く異なっている。

宋代における盧同は韓愈の詩を基盤とした人物像が展開する一方、茶文化においては盧同の詠じた「走筆謝孟諫議寄新茶」、すなわち茶歌が次第に注目されるようになる。宋代文人たちは、陸羽の『茶経』を喫茶形態の基本としつつ、茶歌に詠じられた七碗、清風等をキーワードにその自由な喫茶の境地と人事尊厳を詠じた観を理想とし評価した。また、

ことも不可能ではない。唐から明清の資料が時代順に配列されているため、茶文化用語の変遷が考えられるということである。たとえば、唐代の喫茶は、後代から見ても、「煎」で記述されやすいことなどがわかる。また、『続茶経』は、武夷茶の資料が豊富であり、それが清代を代表する半発酵の名茶に発展するまでの経緯を知ることができる。

『続茶経』は、過去の茶書を集成するという、明末以来の試みの一種で、独自の説を持たないが、古今最大の茶の類書として価値がある。これは、出版文化が盛んな福建では、資料収集が容易であったためでもある。

近畿例会

(平成二十三年七月九日)

「炭手前についての一考察

〜三炭の成立とその意味づけ〜

岸本真理子

水屋仕事であった炭は、手前として成立した。その背景には、巧者に炭を所望する「炭所望」が、その一端を担ったものとみられる。元和に入ると『松屋会記』に「まわり炭」との記述がみられる。この「まわり炭」は、一定の約束にのっとって行われたとみることが

でき、この一定の約束こそが手前ともいえる。天正年間に、次第に客前に出、様々な形式で行われるようになり、慶長年間には手前としてかなり広まり、元和に入る頃には、炭手前が確立していたとみることが出来る。

炭手前確立の過程において、「三炭」と呼ばれる形式が整っていく。利休時代より、茶湯者として一日中常に釜を掛けていることが求められていたが、江戸初期には、「常に釜を掛けている中での一会」と、「一会のための釜」の両形式がみられるようになる。次第に「常に釜を掛ける」ことの実践から遠ざかると同時に、茶会の中での「三炭」それぞれに新たな観念が見出されていった。ぬれ釜を尊ぶこと、炭の流れに風趣や仏法の心持をみること、客をいつまでもとめる心、などである。

以後、茶事七式などのように、種々の茶事の形式が、明確に定められていく。それに伴い、炭手前はその役割と意味をさらにはっきり規定されることになり、現在へとつながったのであろう。

「盧同の茶」

木村 栄美

絵画の題材にも採り上げられるようになる。そこには韓愈の詩歌を基盤に一奴一婢を加え、詩には詠じられていなかった喫茶の風と統合された構成で描かれている。

日本の中世においては、まず茶の覚醒作用を重視し、そこに陸羽の『茶経』を經典に、

盧同の茶歌における開放的な喫茶観を理想とした、唐・宋代の文人の影響を受容した。しかし、禅僧の理想像は宋代に描かれた盧同の姿ではなく、明代における隠遁的な文人の姿であった。次第に隠遁的な空間の中で茶器、茶を吟味するという風雅を重視し、その理想を陸羽・盧同に求め、陸盧、あるいは盧陸の風と評していった。そうした中で特に注目しておきたいのは西笑承允が記した「学問所記」

(『南陽稿』)である。そこには豊臣秀吉の、伏見城における喫茶の様相が記されている。秀吉の茶はこれまで茶の湯中心で論じられてきた。しかし、この「学問所記」に著されている喫茶観はまさしく明代における隠遁的な文人の姿であり、言い換えればそれは煎茶の世界である。すなわち利休死後における秀吉の茶は、明代の喫茶文化を受容しようとしていたのではないかと推測される。

こうした様相から今後は明代における淹茶

法がいつ日本で受容されたのか、また以降の公武における茶の湯と煎茶との関係性を考究する必要がある。

金沢例会

(平成二十三年六月五日)

「茶の湯の羽箒」

下坂玉起

羽箒は本来茶人が自ら作るものだった。そのため、古文献には羽箒の仕立て方が詳細に書かれている。各部分の寸法、「もぎあげ(羽弁と柄の間にあげた羽軸だけの部分)」、「竹皮の巻き方、巻止、端の折返し方、紐の種類と結び目の位置、掛け緒のつけ方など、茶人たちは驚くほど微細な部分にも自らの美意識を表していた。

これまで五百本近くの羽箒と多くの古文献を調べて来たお陰で歴史的事柄はだいぶ分かって来たが、現在では当たり前の、柄の端が尖り、一尺余に大きくなったことについてはまだ全くわかっていない。

当日は、全国の貴重な羽箒の写真と、直前に金沢で調査した羽箒やトキや鷹狩りの写真を、猛スピードで申し訳なかったが、スライドで多数お見せした。

会場には、復元した利休の羽箒、各流好みの羽箒、同じ位置の羽三枚つまり三羽(さんわ)分使っている丹頂羽箒を分解したもの、トキの羽箒、本当の「真の羽(断面も左右対称)」、白鳥の翼と座掃、色々な鳥の羽箒、羽の清らかさの共通性を示す他民族の儀式用羽箒など、段ボール一箱分展示し、自由に手に取って頂いた。多様な羽箒を実感して頂けたのではと思う。

金沢は日本野鳥の会の創始者・中西悟堂氏の出身地。その地で、氏が提唱した「野の鳥は野に」やトキの保護についても触れることができ、ありがたく思っている。羽箒は茶人の好みや昔の鳥の情報が分かる貴重な歴史資料でもある。傷んでも決して捨てずに後世に残して頂きたい。

北陸例会

(平成二十三年七月二日)

「九谷陶磁器について」

中越康介

九谷陶磁の歴史を確認するとともに、九谷焼と江戸期における茶会記との関係を見つめ直し、さらに九谷古陶磁の実物資料の実見・実触を通して、器としての魅力「用の美」を

認識する機会とした。

日本において、江戸時代前期(十七世紀)に磁器が生産された土地は、有田、九谷、姫谷の三箇所しかなく、まず当時としては画期的であるこの事実を注視しておく必要がある。古九谷(明暦元年以前)元禄頃)に端を発する九谷焼の歴史は、再興九谷諸窯(十七種程度)を経て現在に継承されている。これらはいずれも、大聖寺藩初代藩主前田利治と本家である加賀藩前田家の高度な美意識が基となって開花した産物である。九谷絵付は、九谷五彩(赤、緑、紫、紺青、黄)の用いられ方によって、青手、色絵・五彩手、赤絵・金襴手の三種類に分けられ、画面構成は、主題を画面一面に描いた絵絵と呼ばれるものと、見込みに主題、周辺は文様を書き込む二段に分けたものに大別される。幕末から明治の九谷焼は、文久元年の加越能名物産物番付では西の六位、明治二十一年の大日本陶磁器窯元一覽では大関以下ではなく世話役として挙げられており、その位置付けの程度がうかがえる。古九谷、再興九谷(吉田屋、宮本屋、松山など)の九谷古陶磁は、その殆どが北陸地方を中心に伝世しており、大聖寺、金沢、小松の順で上手の物があると昔から言われている。

これらは、生産だけではなく、集中した消費地でもあったことを示している。

九谷焼に関する江戸時代の文献は藩士の日記の類などに散見知られているが、今後は、比較的残り易い割にはまだまだ未開である「茶会記」について注目していきたいと考えている。今に知られている例としては、『臘月庵日記』では貞享三年(一六八六)に一箇所、『梅花庵茶会記』(中越良隆『大聖寺藩南坊流 梅花庵茶會記』(一九九八、蔵六園)収載)では文化十三年(一八一六)と文政三年(一八二〇)の間に七箇所、『菱屋菱坡茶会記』では文政七年(一八二四)と天保十二年(一八四二)の間に五箇所、『茶の湯日記』では弘化三年(一八四六)と嘉永三年(一八五〇)の間に六箇所が見られ、近年では前田直躬茶会記(『前田直躬茶会記(一)』(二〇一一、前田土佐守家資料館)収載)が公開され、その寛保二年(一七四二)と宝暦六年(一七五六)の間には十一箇所が見られる。これは、写本ではないこと、古九谷と再興九谷の間である十八世紀において、どのような九谷焼がどのように使用されていたかを把握することのできる資料として価値が高い。これらの茶会記は、焼物の産地まで記入されて

いない場合が多いため、実際に使用された九谷焼はより多かったものと考えられる。

例会のご案内

東京例会

十一月十九日(土) (会場：実践女子学園)

「桃天館(とうようかん) 午後二時」

「細川家伝来茶入に付属する仕覆・挽家袋の銘について」 小山弓弦葉氏

「古筆切(仮)」 松原 茂氏

一月二十一日(土) (会場：東洋英和大学大学院) 午後二時

「豊臣秀吉の吉野の花見と、吉野花見図屏風」 三宅秀和氏

「茶の湯と昭和初期日本におけるデザイン運動」 細谷 誠氏

静岡例会

九月二十五日(日) (会場：袋井市立中央・南公民館) 午後一時半

「日本煎茶史概説」 船坂富美子氏

「急成長する中国茶業と茶文化」

小泊重洋氏

一月二十八日(土) (会場：静岡県男女共同参画センター「あざれあ」) 午後一時半

これらは、生産だけではなく、集中した消費地でもあったことを示している。

九谷焼に関する江戸時代の文献は藩士の日記の類などに散見知られているが、今後は、比較的残り易い割にはまだまだ未開である「茶会記」について注目していきたいと考えている。今に知られている例としては、『臘月庵日記』では貞享三年(一六八六)に一箇所、『梅花庵茶会記』(中越良隆『大聖寺藩南坊流 梅花庵茶會記』(一九九八、蔵六園)収載)では文化十三年(一八一六)と文政三年(一八二〇)の間に七箇所、『菱屋菱坡茶会記』では文政七年(一八二四)と天保十二年(一八四二)の間に五箇所、『茶の湯日記』では弘化三年(一八四六)と嘉永三年(一八五〇)の間に六箇所が見られ、近年では前田直躬茶会記(『前田直躬茶会記(一)』(二〇一一、前田土佐守家資料館)収載)が公開され、その寛保二年(一七四二)と宝暦六年(一七五六)の間には十一箇所が見られる。これは、写本ではないこと、古九谷と再興九谷の間である十八世紀において、どのような九谷焼がどのように使用されていたかを把握することのできる資料として価値が高い。これらの茶会記は、焼物の産地まで記入されて

「竹川竹斎と静岡」 岩田澄子氏

「江戸時代の静岡の茶」 中村羊一郎氏

静岡県男女共同参画センター(静岡市駿河区馬淵二丁目十七の二、静岡駅から国道一号线沿いに西へ徒歩約九分)

東海例会(会場：名古屋文化短期大学)

アセンブリホール 午後二時

九月二十四日(土)

「千家七事式の創案」 谷端昭夫氏

十一月十九日(土)

「尾張徳川十代斉朝の懐石」(仮題) 佐藤豊三氏

近畿例会

十月一日(土) (会場：ハートピア京都第五会議室) 午後二時

「日常の行いを型として学ぶこと」 杉谷朱美氏

「中国の喫茶法にみる、茶を粉末化する技術」の変遷」 廣田吉崇氏

金沢例会

十一月六日(日) (会場：金沢市本多町)

「中国の喫茶法にみる、茶を粉末化する技術」の変遷」 廣田吉崇氏

金沢市歌劇座集會室

金沢市立中村記念美術館

「金沢蘭秘録から」 戴下 宏氏

明治四十五年井上世外が見た金沢の名門の仕室

明治の元老として明治期の財界に君臨した井上馨(世外)が明治四一年、四五年二度に亘り金沢を訪れ滞在して見聞した金沢の名門が秘蔵していた仕室に関するエピソード。

講師 金沢市立中村記念美術館館長

戴下 宏

「茶壺と御茶壺道中(宇治採茶使)」

森田宗圓氏

寛永十五(一六三八)年に始まり、恒例として行われた將軍家使用の宇治茶を詰めた御物茶壺の江戸への行列道中について。

「茶壺に迫られて戸をピシヤン云々」の俗謡も生まれた。

講師 天津商業大学裏千家短期大学講師 森田宗圓

会費 会員千円 一般二千円(学生千円)

講師を囲んでの懇親会

日時 十一月六日 午後一時より

場所 金沢市本多町「石亭」

会費 三千五百円

北陸例会（会場：未定）

三月三十一日（土）

「未定」

未定

高知例会（会場：高知県立文学館）

慶雲庵茶室 午前十時～

十二月十一日（日）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「茶の湯名言集」 田中仙堂著 井上佳彦氏

「よくわかる茶道の歴史」 谷端昭夫著

小松 聡氏

「敵味方をこえて芸道の理念と実践（茶道を中心に）」 倉澤行洋著 柏井 武氏

茶事 席主 福田悦子（十二時～十六時）

会費五千元

二月十二日（日）

「石州流三百ヶ条不白答（上）常用文」

柏井 武氏

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時～十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

（会費三百円）

お知らせ

*年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みください。また、すようよろしく願います。

